

教職大学院 Newsletter No. 75

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2015.7.4

アクティブ・ラーニングを支える教員養成 ～高大接続システム改革が目指すものとその実装のために～

文部科学大臣補佐官 鈴木 寛

平成27年2月より文部科学大臣補佐官を拝命し、文部科学省に復帰することとなりました。

文部科学副大臣時代に福井大学教職大学院に視察にお邪魔し、その時以来、お付き合いを続けさせていただいており、本年の2月のラウンドテーブルにおいて開催されたシンポジウムに登壇させていただくなど、強い御縁を感じております。引き続き何卒よろしくお願ひ申し上げます。

私は現在、文部科学大臣補佐官として「高大接続システム改革」について特に中心にお手伝いをさせていただいております。「高大接続システム改革」とは、高等学校教育の質の確保・向上を図るとともに、高等教育への円滑かつ有益な移行について現状の課題を明確にし、解決策を提示しようとする試みです。

さらに、各大学におけるディプロマポリシー（学位授与に係る考え方）及びそれに基づくカリキュラムポリシー（カリキュラムの編成及び教育活動の実施方針に係る考え方）、アドミッションポリシー（大学入学時点で求める学力の水準及び評価方針）を明確にし、大学入試の在り方を見直すことまで射程に入れております。

私は、高校生活とは「書を読み、友や師と語り、仲間と何かを為す」ものであるべきと考えております。それは、高校時代にこそ、人生の基盤となる浩瀚な書物に触れることにより、人生の基盤となる先人の知恵をたくわえ、また、友や師と語らうことによって自らの人生の指針を見つけ、あわせて困難な課題に立ち向かい何かを成し遂げる体験を積むべきではないかと考えているからです。

それでは、現在の高校生が私が理想とする生活を送れているかという点、必ずしもそうではありません。国立教育政策研究所の調査によれば、高校生のうち、1か月間の平均読書冊数は1.6冊、毎月1冊も本を読まないという生徒が約半数に上るといいますので驚きです。

この原因は、スマートフォンの普及による活字離れなど様々な要因があるのだらうと思われませんが、あわせて現在の大学入学試験の在り方にも原因があるのではないかと推測されます。

特に、一部の大学入試において、過度に知識を偏重し、丸暗記を推奨するような問題が出題され、そ

うした大学を目指す高校生に対して、有益とは思われない受験勉強を強いてしまっていることも大きな原因ではないかと考えています。

こうした状況を打開するためには、脱マークシート型試験、脱マルチプル・チョイスにより深い思考力・表現力・判断力を問う出題や論述式を増加させるとともに、AOや推薦等の高校時代の活動を評価することが重要です。

現状を改革することは容易ではありません。しかし、10年後、100年後の我が国の姿を見据えた時に、大志を抱く若者が些末な暗記にその高校生活を費やすことなく、主体性をもって多様な人々と協働して問題を発見し解を見出していく能動的学習（アクティブ・ラーニング）に費やすという変革は極めて重要であり、そのために高大接続システムを改革することが必要不可欠であると考えています。

これからは変化に富む時代であり、折々の知識は5年も経てば陳腐化します。だからこそ臨機応変に対応する力、非定型の課題を乗り切る力を養わねばなりません。これからの人づくりは、パッシブラーナー（受動的学習者）からアクティブラーナー（能動的学習者）をどう育てていくかが、もっとも重要なのではないのでしょうか。

私は、文部科学大臣補佐官として次期学習指導要領の改訂にも携わっており、中央教育審議会における議論にも参加していますが、その場でもアクティブ・ラーニングの重要性が繰り返し訴えられています。

児童・生徒のアクティブ・ラーニングを支えるのは、言うまでもなく教員であり、アクティブ・ラーナーを養成するためには、教員自らが現場のニーズの多様化や複雑化を積極的に把握し、そうした状況に対応するための解決策を自ら見つけ出す能力を有することが不可欠です。

そのためには、積極的な実習や実践の経験が重要であると考えられ、福井大学教職大学院では、学校を拠点とした教職大学院においてこうしたニーズに応えるべく先進的な教員養成が行われております。

福井大学のこうした取組に賛同の意を示すとともに、今後とも、変化をいち早くとらえ、新たな時代にふさわしい新たな教育法の研究・開発・実践を普及していく役割を果たされることを期待いたします。

福井大学教職大学院

平成27年度 第1回運営協議会が開催されました

福井大学教職大学院・教授

二宮 秀夫

5月20日（水）に福井大学文京キャンパスにおいて、平成27年度第1回運営協議会が開催された。はじめに中田隆二・教育学研究科長，次に・古谷清和・福井県教育庁企画幹の挨拶の後，全体協議会及びグループ別協議を行った。

前半の全体協議会では，次の内容が協議され，原案通り承認された。

- 1) 福井大学教職大学院の運営（案）及び平成27年度年間計画（案）について
- 2) 平成28年度学生募集スケジュール（案）について
- 3) 拠点校・連携校担当教員について
- 4) 平成27年度教員免許状更新講習（必修領域）について
- 5) その他（6月ラウンドテーブルについて）

後半のグループ協議では，県教育委員会，市町教育委員会，拠点校，連携校（2グループ）の5つのグループに分かれ，これまでの成果や課題，要望などについて活発な意見交換がなされた。

【県教委】

教職大学院修了生生活用との状況について，また，行政との協働を踏まえた今後の展開について情報交換や論議を行い，県教委と大学との連携による教職大学院の取り組みの成果を確認し合うとともに，その成果の普及・啓発について考える場となった。

修了生の活用については，修了生が教職大学院での学びの在り方を生かし，課を超えた協働の研究会によりビジョンの共有や意思疎通が図られていることが，教育研究所や嶺南教育事務所から報告された。また，小中学校だけでなく高校訪問においても，修了生が核になって授業改善に取り組む学校が出てきていることなどが紹介された。実践・省察・再構成という教職大学院での学びを生かした校内研修が多くの学校で展開されており，修了生の学びが広がっていることが共通確認できた。

成果の普及・啓発では，評価という視点でも議論された。院生の長期実践報告や，授業改善重点校での生徒の成長の姿が見える映像記録など，院生自身の学びや変容，関わる子どもたちの成長の様子，障碍者にも適応できる内面の変化などを評価の指標にできないかなどの示唆も得ることができた。

【市町教委】

ここでは，スクールリーダーの院生や修了生の現状と成果について協議を行った。院生のいる学校では，学校拠点方式で大学が関わることで若手だけで

なくベテランの教員の力量も向上し，学校全体の授業力が向上しているなどの報告があった。修了生の活用については，修了生の在籍する学校の授業参観を奨励したり，他校の全体会へ他の教員を誘うよう依頼したりするなど，人的ネットワークを広げることが意識した取組や，市の教員研修会で院生が教職大学院での経験を語る場を設定するなどの取組が紹介された。どの学校にも修了生が配置できるようになったため，修了生が若手育成や他校との連携などの企画・提案を行うなど，修了生の積極的な活用の仕方を模索しているという報告もあった。一方，修了院生に課題別研修の企画をさせたいが負担をかけることになると思うと躊躇するなどの意見も聞かれた。教職大学院の取組は高く評価していただいております。そのよさをもっと積極的に管理職も含め教員にアピールするなどの要望もあった。次年度の管理職コースについては，校長会，教頭会とも連携して対応していきたいため，概要が固まり次第知らせたいという要望があった。

【拠点校】

ここでは主に，院生の現状と成果と課題，新しい管理職コースのことについて意見交流を行った。

院生の現状として，どの院生も熱心に取り組んでいる状況が報告され，ストレートマスターの院生ではT2的な関わりだけでなくT1的に全面的にできてきているのではないかと示唆もいただいた。修了生が組織し展開している授業研究会が学校全体に刺激を与えているなど，院生交流が様々な刺激・知見を校内に呼び込んでいるという報告もあった。課題としては，校外学習の経済支援，職大学院で学ぶことのインセンティブの問題なども取り上げられた。インセンティブの問題については，県と連携し今後も検討していきたい。

管理職コースについては，どのようなコースなのかという質問に「中・長期的な視点に立って学校の取組を見直す軸となるものを学ぶ機会をつくることであり，学校の取組を徹底的に吟味し，危機管理などの難しい問題も，しっかりと事例に則して学んでいくような軸をつくっていく。その真ん中に据えていくのは，学校の教師たちの取組をどのように支え，ミドルリーダーを支え，将来をどのように見通していくかということである。」という旨の専攻長の説明に理解を示していただいた上で，これから求められる学力の問題，急激に変化する社会への対応など取り扱うべき内容や，ミドルリーダーコース修了生のキャリアパスなどについても協議した。

【連携校】

小・中・高等学校グループでは各校から、院生に職場の教員たちを調整する力が付いてきたこと、校内研修と教職大学院とが連動し現場での力になっていること、教材研究の段階から院の教員に指導してもらえたらなど、スクールリーダーの活躍の様子や教職大学院の教員の関わりの効果や期待が報告された。

また、理論と現実とのギャップがあり、理論先行にならないようにしなければならないこと、理念だけでなく、使命感・責任感を基盤とし子どもの信頼関係を築くことができる実践的な指導力の必要性なども話題に提起され、学校現場での実践と理論の往還を大切にしたい教職大学院のコンセプトでもある重要な点を再確認できた。

特別支援学校のグループでも、学校での院生の様子や課題について話し合われた。院生のいる学校では、高等部の研究会が小中の部会に波及したり外部の先生を招いたりなど積極的に活動している、教職大学院での学びが生き修了生がリーダーシップを発

揮しているなどの報告があった。教職大学院の教員派遣について、子どもたちのことだけでなく、教員の成長を継続的に見てくれているという感謝の言葉もいただいた。

課題としては、院生が別の学校に移動になると研究が全体に停滞してしまい、院生の研究の質をどう継続していくかという問題や、教職大学院修了者修了という事実が形に残りにくく院生は院が終われば一教員に戻ってしまうことなどが出てきた。後者については、ある問題意識をもった学校が教職大学院に問い合わせれば、それに関連した研究や経験をもつ修了生が紹介されるというシステムがあれば、教職大学院の学びも広がり、その修了生から刺激を受けた若手の教員が教職大学院進学を積極的に考えるようになるかもしれないなど具体的な案も提起された。

これら運営協議会の各グループでの協議内容は、教職大学院スタッフで再度分析・検討を行い、改善すべき課題については、関係学校、教育委員会とも連携し、その状況改善に着手していきたい。

5月合同カンファレンスに参加して 学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望を拓く

スクールリーダー養成コース2年／福井市足羽中学校

柘植 泰子

5月16日（土）に、5月の合同カンファレンスが行われた。この日のテーマは「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望を開く」である。私は、自分の学校で行われようとしている研究の方向性とこれからやろうとしていることについて話をさせていただいた。

今年度の足羽中の研究の柱となっているものの一つが「授業のユニバーサルデザイン化」である。本校では、授業のユニバーサルデザイン化を進めていくために、「構造化」「共有化」「視覚化」の三つのグループに分かれて授業研究を行っていくという研究体制をとっている。私はその中の「共有化」のリーダーとして、研究を進めていくことになった。

前回の校内研究会では、グループごとに分かれてそれぞれの研究の進め方などについて話し合った。共有化グループでは、「何を共有するのか」「研究の進め方」について話し合った。リーダーとして、いろいろ考えて研究会に臨んだが、考えがまとまらなかったこともあってうまく伝わらない。どの先生方も同じで、いったいどうしたらいいのかという雰囲気になってしまう。しかし、これまでの実践で自分が

やってきたことの中に子どもたちが共有しているものはないか、と考え始めると、体育科でのグループでの教え合いや、英語科でのペア活動など、どの教科でもいろいろなものを生徒たちが共有していることが見えてきた。整理すると、「課題の共有」「探究や課題への取り組みの共有」「結果や学習成果の共有」になるのではないかと、いうところに落ち着いた。そこで、自分の教科でその3点について、これまでできていたことを振り返ると、どの教科でも工夫してきたことだということに行き着いた。そこで、今年度は、自分たちが実践していることを記録に残していった、蓄積されたものを整理していくこととなった。

この話をさせていただいたところ、授業のユニバーサルデザインについては、言葉としては目新しいように感じるが、やっていこうとしていることは、これまででも考えてきていることで、特に目新しいことではないというご意見を多くいただいた。そして、今年度しようとしていることは、それぞれが工夫していたり整理されておらず漠然としているものを、自分で振り返ったり話し合ったり記録して整理した

りすることではっきり見えてくるようになる、そのことに意味があるのではないかと、というアドバイスをいただいた。

今回のカンファレンスで印象に残っているのは、「先生が立ち上げたら、子どもにすぐに反映するか」「我々教員が目標としているのは、子どもが楽しいって思える授業であり、子どもが学びを深められる授業である」という言葉である。様々な分野で新たな取り組みが絶えずされているが、それはすぐに子どもに反映されてよい結果となるものもあるが、ずっと後になって表れるものもあるだろうということはなるほどと思え、我々が目標としている授業についても、授業を考えるときには絶対に忘れてはならない視点だと再認識した。

また、今回は、鳥取県の船田先生のお話も聞くことができ、福井の当たり前が県外では当たり前でない

ことのいくつかを再確認できた。福井のよいところはこれからも続けていけたらいいと思うと同時に、県外の良さもどんどん取り入れていけたらいいと感じた。

合同カンファレンスのたびに感じるのだが、自分が考えていることややろうとしていることなど、頭の中でまとまっていなかったり迷っていたり自信がなかったりすることを先生方に聞いていただくことで、進もうと思う方向性が明確になるように思う。それと同時に、多くの先生方の話を聞いて、「また明日から学校でがんばろう」という元気をいただけていることを感じる。教職大学院も2年目となるが、このように心地よい学びの機会をいただけたことに感謝し、学んだことを実践報告書にまとめていきたいと思う。

スクールリーダー養成コース1年／高浜町立高浜中学校

北村 仁志

今年度4月より福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学し、2回目の合同カンファレンスに参加させていただいた。先月の合同カンファレンスは、2日間にわたって行われたが、今回は1日だけの日程で行われた。「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」というテーマのもと、午前は、「春江小学校での実践紹介」、「それぞれの学校で動き始めた状況について、グループで語り合い、捉え直し展望をひらく」、午後は、「専門教科・領域の授業づくりとカリキュラムマネジメントに関する実践記録を読む」の内容で学びを深めた。

オリエンテーションでは、道徳教育の研究に取り組んで来られた春江小学校の山田先生から、今回のテーマの意味と具体的な実践の事例について紹介いただいた。教職大学院で何を学ぶのか、スクールリーダーとして何をどのように進めていくのか、これまでどのようにして研究を進めてこられたのかということについて、具体的な取組やその成果と課題を聞かせていただいた。

中でも、本校の研究内容に深く係わりがあり、私自身がこれまでに何度も耳にしてきた言葉が印象に残っている。それは、「協働する組織づくり」「子どもの見取り」ということである。

今年度から研究主任という立場になり、まずは教職員全員で「協働」しながら研究を進めていきたいと考えている。しかし、どのようにすれば「協働する組織づくり」を進めていくことができるのか、疑問点が多い。今回の山田先生のお話や前回の合同カンファレンスを通して、この疑問に対する解決の糸口が少し得られたように感じる。それは、研究主任から、「～をしてください。」「～をします。」というように、一方的に強制するような形で進めるのではなく、「～をしようと考えていますがどうでしょうか?」というように、「みんなで一緒に創っていく」という姿勢で進めていくこと、また、定期的に取組の省察を行い、先生方から意見や考えをいただきながら修正を



繰り返していくことなど、みんなで話し合い、共通理解を図りながら進めていくことが、「協働」していく上で大切であるということである。後のグループ・セッションで、「チームが育てば個が育つ」と話された先生の言葉が忘れられない。もちろん、これだけが全てではないが、これからの研究の取組の省察や教職大学院での学びを活かしながら、「協働する組織づくり」を意識して取り組んでいきたい。

次に、「子どもの見取り」は、本校においても取り入れている。春江小学校で挙げられていた課題については、本校における昨年度の反省と共通する部分が多くあり、とても興味深く聞かせていただいた。授業研究会において、「論点が多く、話がまとまらない」「生徒の動きを追いすぎて、生徒の反応だけを細かく伝え合うことで協議が終わってしまっている」「専門的な指導技術も高めたい」などの課題が本校においても挙げられている。この課題を解決するために、山田先生の取組を参考にさせていただきながら、今年度は、「論点を絞る」「生徒の反応から、どのような発問をするとよかったのか、どのような手立てをとるとよかったのか」など、必ず授業者の指導改善に

つながるような授業研究会を目指したいと考えている。また、この課題については、午前中のグループ・セッションにおいても話題として挙げ、他校の先生方からいろいろなアドバイスをいただいた。「授業者は若手教員なのか。ベテラン教員なのか。対象者によって話し合うポイントを変える必要がある。」ということを教えていただいた。

午後のクロス・セッションでは、福井大学教育地域科学部附属中学校の数学の授業実践記録を読み、話し合った。その中で印象的であったことは、「学びのストーリー」である。例えば、第2学年の数学の学習においては、教科書通りでは、「連立方程式」→「一次関数」のように代数分野の学習を終えてから関数分野の学習に入る。しかし、附属中学校では、この2つの単元を同時に学習するカリキュラムを設定している。他学年においても、そのような単元構成が設定されていたことに、正直驚いた。そして、とても興味が湧いてきた。「自分も同じような単元構成で実践してみたい。」と思ったが、グループで話し合っていくうちに、「興味本位で出来るものではない」というこ

とも分かってきた。これらの実践の裏側には、教師集団の並大抵ではない努力や試行錯誤の繰り返しが見え隠れしていると感じた。日々授業を行う上で、見通しを持って実践することが大切なことは言うまでもないが、このような変則的かつ長期的な実践を行うには、当然、そのねらいや具体的な学習活動などを明確にしておかなければならないだろう。この点からも、日頃の教科部会を充実させ、チームで取り組んでいる附属中学校の姿が見て取れる。附属中学校の授業は、これまで一度も参観したことがないため、機会があれば、ぜひ参観させていただきたい。

教職大学院に入学してから、今回で2回目の合同カンファレンスであったが、個人的には昨年度からこの会に何回か参加させていただいている。他校の先生方とのクロス・セッションを通して、自分自身の知識や視野を広げたり、自校の取組に対してアドバイスをいただいたりと、とても有意義な時間を過ごすことができた。ここで学んだことを、ぜひ今後の実践に活かしていきたい。

スクールリーダー養成コース1年／福井県立嶺南東特別支援学校

河端 稔

5月の合同カンファレンスでは、午前中、それぞれの学校で動き始めた状況について、グループで語り合い、捉え直して展望をひらく時間が設定されていた。また、午後からは、専門教科・領域の授業づくりとカリキュラムマネジメントに関する実践記録を読み、小グループでその教師の実践とコミュニティの在り方を探る時間が設定されていた。この合同カンファレンスの前日、本校高等部では、今年度第1回研究授業－授業研究会が行なわれ、まさしく今年度の研究が動き始めた状況であったため、午前中のグループセッションは私にとってタイムリーな時間となった。私は現在、研究部の一員として高等部教員30名の研究活動においてリードする立場にある。本校に新採用として着任し、今年で高等部、研究部とも5年目になる。これまで外部支援者の力を借りながら、より良い研究授業－授業研究会の形を追い求めてきた。まだまだ理想を追い求めている途中ではあるが、現在の研究授業の参観方法は次のとおりである。『参観者は、授業中終始一人の生徒にはりつく。そして、子どもの言動より、ストーリーを組み立て、子どもの視点より授業改善を提案する。つまり、参観者は、子どもと一緒に授業を受けて、子どもの代弁人になる。』この参観方法に辿り着くまでに、これまで4年間紆余曲折してきた。また、放課後の授業研究会は、小グループ協議とクロスセッションを中心に組み立てている。初めに6人ずつの6グループに分かれて40分間のグループ協議をし、その後グループを一度シャッフルして分け、また、それぞれのグループで話し合われたことを語り合い、聞き合うという流れである。福井大学教職大学院から倉見先生、小林先生、小嵐先生、綾城先生、加藤先生、松井先生の6名の先生方に来校していただき、それぞれのグループ

に入ってファシリテーターの役割をお願いした。教職大学院の先生方にファシリテーター役をお願いした理由は二つある。一つは、小グループにおいて、よりよく協議を深めるためであり、もう一つは、ファシリテーターとしてのモデルを学び、将来的には本校の教員だけで協議がうまく進行できるようにするためである。

今年度、動き出した本校研究活動の様子と経緯、また、それらを設定してきた理由を自分の言葉で他者に語るにより、再び自分の中で整理されていく様子が自分でも実感することができた。また、グループメンバーの質問に答える中で、これからの課題となるものが見え隠れしてきた。タイムテーブルでは1時間半のグループセッションも、実際に始まってみると「時間が足りない。もっと聞きたい、話したい」と素直に思ってしまうのが不思議である。

午後からは、実践記録リストの中から、富山市立堀川小学校の知的障害特別支援学級の自立活動『劇づくりでの言葉の働きかけを実感し、自己有用感を高める子ども』を読んだ。本校でも、学校祭にむけて約1ヶ月間子どもたちと劇づくりをしているため、自分の実践と結びつけながら読み進めることができた。実践記録からは、劇という題材をとおして子どもたちと丁寧なやりとりをしている教師の姿が読み取れた。劇の配役において、それぞれ立候補させ、そのなりたい理由を尋ねていき、子どもたちの思いに迫っていく。劇のセリフも「どのような動きをつけたらよいか、気持ちを込めたらよいか」など子どもとの丁寧なやりとりが展開されていた。ついつい、劇を成功させたい、より良いものを作りあげたいという思いが先行し、子どもたちの思いを十分膨らませきれない自分自身の実践に気付かされた。

教師は、授業において、題材をとおして子どもたちにつけさせたい力や分かってもらいたいこと、ねらい等を設定している。しかし、それにとらわれすぎると子どもたちの表情やしぐさを見落としてしまい、子どもたちとの大切なやりとりができなくなってしまい、教師の単発的な投げかけに終始してしまいが

ちになる。子どもたちの思いを汲み取りながら、子どもたちと一緒に授業を創っていくという大切な視点を改めて気付かされた時間となった。

他者と語ること、聞くこと、読むこと、そして書くことの大切さを痛感した一日となった。

教職専門性開発コース2年／福井市中藤小学校

高橋 聡志

大型連休が明け、4月の疲れも見え隠れする頃、5月の合同カンファレンスに参加した。4月の合同カンファレンスは2日間にわたって行われたが、今回から1日のみ、時間も9時から14時20分までと集中的に行われる。

オリエンテーション後、早速午前のグループ討議へと移った。「それぞれの学校で動き始めた状況について、グループで語り合い、捉え直し展望をひらく」のテーマの下、語り合いが始まった。しかし、私は正直語ることが怖かった。と言うよりも、語ることが出来るか不安だったと言うべきだろうか。私たちストレートマスターの院生は教員採用試験の関係もあり、M2となる今年は週に1日のインターンシップとなる。大型連休も挟んだ関係で今年度は未だに5回しかインターンに取り組むことが出来ていない。語る内容が豊富になく、まとまりのない語りになってしまわないか不安であった。しかし、グループの先生方が話題を広げ、時には質問を投げかけてくださり、最終的には展望まで開くことができた。

私が語った内容は「私の担当している学年が今年に入ってから活力を増した」ということである。クラス替えをしてまだまだ様子見をしていることも考えられるが、学習意欲も生活態度も4年生の時と比べ、向上していると感じられる。環境が変わって頑張ろうとしている姿勢が見られるようになったと週に一度のインターンシップながらそう感じている。グループの先生方からは「4月が子どもたちにとって変わろうとしたタイミングなのかもしれない。」「この状態をいかに継続していくかが重要だね。」「いつか子どもたちも疲れてきちゃう日が来る。太いパイプ、子どもたちとの信頼関係を今作ることが大切。そのために子どもたちの自尊感情を育てる実践を。」とコメントを頂いた。「継続」とそのための「支援」を考えていくことが、今後の展望となった。こうして、セッション前には語ることでできる内容に対して不安が渦巻いていたのだが、語る中でその話題は大きく膨らみ、より具体的な実践報告となっていった。語り手自身が省察しながら、聞き手は追体験をする。協働の良さを改めて感じた瞬間だった。また、グループでは「ユニバーサルデザイン」「研修」「つながり」の3点でも話し合いが行われた。授業における「ユニバーサルデザイン」は、意識はしていないものので

に日常的に行っており、その実践を理論付けし改めて意識付けするために、記録に残すことが重要だとされた。「研修」では、魅力あふれる研修とはどのようなものかが話し合われ、どのような研修なら参加してみたいかという話題で盛り上がった。例えば、脳科学者である茂木健一郎さんを外部講師として招いたことがあるが、その時の参加者は感動や驚きなど、新たな視点を得ることが出来たのだという。グループでは、自分の興味のある研修に参加したいという意見も出された。「つながり」では、福井のよさとして、つながらずを得ない仕組みが整っているからこそ協働が生まれているのだと話し合った。例えば、時間割に研究や、地域との交流が組み込まれている。そのような仕掛けが福井の協働研究を支えている要因だと話された。また、外に出かけていく教員が多いのも福井の特徴であるという。こうした福井で普通に行われていることが、県外の先生方には驚かれるということで、福井の良さを少しずつでも伝えられればという話でこのグループでの討議を終えた。

午後からは、個人で実践研究の記録を読み、実践者の成長を読み取った。その後、午前とは違うグループに分かれ、各実践報告書の感想を語り合った。私たちのグループでの主な話題は、「子どもに切実性をもたせながら、いかに授業を子ども主体で進めていくことができるか。」という点にあったように思う。実生活であまり使われない物や歴史のように過去の事に対して、どうアプローチさせていくのか。国語科においては、相手に伝わる話し方についてチェックリストという名の評価基準を子どもたち自身に作らせ、相互評価を自ら行わせるような実践報告も聞くことができた。子ども主体の授業を作っていく際の教師の立ち位置や、時間的制約などの問題点も挙げられたが、子どもが探究していきたい問いについて常に考え続けることが教師自身の成長に繋がるのではと考える。

来月にはラウンドテーブルが控えている。1年間のまとめを語らせていただく重要な機会となるが、今回の合同カンファレンスで得られた新たな学びも含め、これまでのカンファレンスを見直す契機としたい。一年前では語れなかったこと、私自身が成長できたことを次回のラウンドテーブルでお届けしたい。

5月16日(土)の合同カンファレンスに参加した。終始ずっと緊張していた4月の合同カンファレンスとは違い、2回目の今回は場の雰囲気にも慣れてきたこともあり、少し落ち着いてカンファレンスに臨むことができた。

5月のテーマは「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」というものだった。最初のオリエンテーションでの春江小学校の山田先生のお話では、『子どもの見取り』という言葉が出てきた。この言葉は4月での合同カンファレンスで同じグループになった上島先生のお話の中でも出てきており、この1ヵ月間私の胸の内にずっとあったものだった。日々の実践の中で授業中の先生の様子ではなく、子どもの見取りをしようと思っても、いったいどこに着目したらいいのか分からない時間が多々あった。今回の山田先生の話の中で、ある一人の生徒と他者との関わりやどの発言に影響されての活動なのかなど子どもの見取りのためのヒントがたくさんあり勉強になった。

午後は「実践記録を読む」ということで、私は田中先生の実践を読んだ。この実践はご当地バーガーの作られた背景を生徒が調べることで、その土地の気候の特徴や文化、宗教などを理解し、さらに自分たちでご当地バーガーを提案することで「世界の諸地域」の調査活動など地理学習での視点を養うものである。この実践を話す中で、基礎・基本の話になった。私は、教科書に書かれている内容＝基礎・基本ではないかと考えていた。しかし、同じ実践を読んだスクーラーリーダー養成コースの金子奨先生(埼玉県立新座高等学校)は、基礎・基本は教科書の内容等々ではなく様々なものを結びつけることだとおっしゃられていた。私はなるほどと思った。教科書を教えるのでは



かく、子どもに付けさせたい力のために何ができるのか、教科書に書かれていないものにどうまなざしを当てるのが大切なのだと実感した。当たり前だと思っているものを今一度問い直すことが今の自分には必要なことだと感じた。

まだ上手くまとめて話をしたり、思いを伝えたりすることができずもどかしい思いが胸の内にあるが、先生方がじっくりと私の拙い話を聞いてくださり、様々なアドバイスをしてくださるため、私にとってこの時間はとてもプラスになっている。先生方のお話を聞いているうちに、自分の中にはなかった新たな視点に気が付き、視野が広がり、もっとたくさんお話を聞いて学びたいという思いが湧き上がってきている。先生方との出会いとこうした学びの場があることに感謝をし、今後も様々なことを学び深め、実践に励んでいきたい。

インターンシップ／週間カンファレンス報告

教職大学院に入学し、早2か月が過ぎようとしています。週3日の小学校でのインターンシップと週1回大学で行われるカンファレンスにも少しずつ慣れてきたところです。子どもを見て、先生を見て、仲間と話して強く思うのは「学ぶって難しい」ということです。つい先日のカンファレンスで先輩に「串君ってよく『よく分からない』って言うよね」と言われました。意識していませんでしたが言われてみるとその通りで、インターンシップで見た子どもの姿や先生の指導、木曜カンファレンスで話題になるアクティブラーニングや授業記録取り方、生徒指導について

などいたるところに分からないことがあふれていました。記録を振り返るたび、資料を読むたび、人の意見を聞くたびに自分の考えが揺れたり、考えをまとめたりすることができず、よく分からないまま結論を出せないでいるのが現状です。恥ずかしいという思いもあるのですが今回の報告ではそんな私の現状を少し話したいと思います。

インターンシップでは子どもの学びを見取る、先生の指導の意図を見取る、子どもが成長できるように働きかけるようにしよう意識してはいるものの、それだけでは全く結果につながりませんでした。

目に映る子どもの姿や先生の指導の意味が読み取れないのです。結果として何を書き残せばいいのかわからず、日々の記録はただただ子どもと先生の発言が書き残せる範囲で書いてあるだけのものになってしまっていました。どうしたらいいのかわからないでいた時、カンファレンスの場で記録を見たり、話を聞いたりできる機会がやってきました。私が自分の現状を話し、アドバイスを求めると「自分の場合は」といって経験や考えを踏まえながら、見ている視点に発言以外の表情や様子、行動があり、それに対する自分なりの解釈を添えていることを教えてくれました。そして話を聞くうちに、それらは私が必死で探していたはっきりとした分かりやすいものなどではなく、些細なことや普段は当たり前と感じ気付かず見逃してしまいそうなことであることにも気が付きました。

またインターンシップでは実際に子どもと関わり指導をする場面があります。その際私は指導の方針や考えが定まりきっていないために、子どもにやらせるべきことや考えさせるべきことを先回りしてやってしまったりすることが多いです。インターンシップで配膳を失敗してこぼしてしまった子どもがいました。「私の分ならなくてもいいか」と考えた私はその子に「(こぼしてしまったものを)片付けて給食食べな」と言ってしまうかした。しかし、担任の先生は「給食食べられん人がいるんだよ!」「こぼしたらどうするの!」と自分がどうすべきか厳しく指導されていました。後で先生から「学校は失敗をしてそ

こから学ぶ場所だから先生が何でもやってはいけないし、考えさせないといけない」と教えていただきました。「子どもが何を思い、どう考えているのか?」「子どもに何を考えさせる必要があるのか?」「考えさせるためにはどういった指導が必要なのか?」などの視点が私には足りていなかったと気付かされました。

この様に私にとってインターンシップと木曜カンファレンスは二つが合わさることで自分が行ったことから振り返り学ぶ場になっています。ただ、上の文章を見ても分かるように思ったことや気づいたことはあっても具体的な改善や新しい取り組みにまで至っていません。はじめに述べた「学ぶって難しい」とはまさにこの部分のことなのです。インターンシップに行けば自分の課題が見えてきます。相談すれば様々な意見を貰うことができます。しかし、それを次のインターンシップに活かすことがなかなかできません。

私の所属する福井大学教職大学院ストレートマスターコースの優れた点は長期インターンシップを行う中で課題を見つけ、知識や理論、他者の意見を取り入れ、次の実践に活かすという三つの過程を何度も繰り返し、改善を積み重ねていく点であると考えています。私は今その長所を活かしきれていません。そして正直な所この問題の解決の糸口も見えていません。しかし、現状を改善して行けるように今後もインターンシップやカンファレンスに取り組んでいきたいと思っています。

教職専門性開発コース2年／福井市中藤小学校

吉田 智保

新年度の木曜カンファレンス(毎週木曜日、ストレートマスターが集い行われているカンファレンス)が始まり早2ヶ月が過ぎた。今年度からは午前の部だけでなく、午後の部も院生による自治的な取り組みが行われている。今回は木曜カンファレンス全体の具体的な内容と私たちの挑戦の実際について触れたいと思う。

まず午前の部は、1週間のインターンシップでの経験を振り返り意味づけする「学びの振り返り」と、月毎の主担当が企画運営する「主担当企画」の2部構成になっている。この「主担当企画」を企画するに当たって、主担当は事前に主担当会議を行う。私は今月の主担当に当たっていた。私を含めた5月主担当は今全員で考えていきたいことは何か、インターンシップと関連させながら様々な意見を出し合った。「インターンシップが始まったけれど、毎回授業を参観してきて…記録…みんなどんな視点で書いてる?」そんな疑問から5月は、参観した授業を省察し自分の実践に繋げるために重要な役割を果たす「授業参観記録」をテーマとした。授業参観の際に着目していること、学びとろうとしていること、またそれを記録に残す時に気を付けていることなど、自分が大切にしている視点について第2週目に語り合った。またそれをもとに、第3週目に附属小学校で授業参観をさせて

いただき、実際に授業参観記録を記した。そしてその参観記録を持ち寄り、第4週目はリフレクションというのが5月の主担当企画の流れである。

今年度に入り、インターンシップの日数が減り自分自身の学びと向き合う時間が増えたため、じっくりと授業を参観する機会が減っていた。そんな私にとって5月の主担当企画は、そのブランクを埋め、また新たな授業参観への視点を増やす機会となった。特にそれを実感したのが、附属中学校への授業参観後のグループでの話し合いであった。私は今回主に特定の児童が授業の流れの中でどのように変化するかに着目しながら参観した。それにより、児童の些細な行動や目線によって、ぐっと集中する場面や興味を抱いた瞬間などを見取ることができた。そして説明文を音読したり、周りの話を聞くことを少し苦手としているかもしれない児童も、目を輝かせて主体的に取り組める活動が授業のあらゆる場面に散りばめられていることに気が付いた。これをグループの中で共有した。それまでは自分だけの視点であったが、自分たちの実践と絡めた意見や同じ児童の班を参観していたメンバーからの新たな意見を聞き共有することで、自分の参観記録に広がりを感じた。また、児童の様子に加え板書とそれに対する児童のノートの取り方から課題を見出していた院生の視点

や、グループ活動にてグループ内の細かな発言を拾い、意見が繋がったと感じた場面を自分の実践と照らし合わせて参観していた院生の視点など、同じ授業によってここまで視点が異なることに改めて驚き、それを共有することで得られる学びに充実感が得られた。

次に午後の部について紹介させていただく。午後の部は現在「授業改革・カリキュラムマネジメント」と「公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習」と構成されている。今年度から大きく変わったのはこの午後の部である。というのも、初めに述べた通りストレートマスター2年（以下M2）が自治的に授業をコーディネートしてくることになったからである。

詳しい経過を報告させていただくと、前半の「授業改革・カリキュラムマネジメント」では半期の計画を立て、アクティブラーニングを取り入れた単元構想を行っている。そこには、ひとつの単元に時間をかけ十分に向き合える今だからこそ、教科書の比較検討や学習指導要領、また様々な実践記録を読み込み、深みのある単元構想を作成してみようという意図がある。また毎回その構想を開き、院生や先生方を交え意見交換をし、協働的に作成することも目的として

いる。後半の「公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習」では、毎月テーマをM2会議で話し合いながら、現在私たちが教員を目指す者として向き合うべきものを取り上げている。4月は午後の前半にも関連させるために「アクティブラーニング」についての多くの資料を読み語り合った。

しかし、毎回山あり谷ありである。3月のラウンドテーブルで発表した大学生版PISAの経験を生かし、読む側に考えてほしいことを意図しながら選択した多くの資料も、実際にカンファレンスを行うと狙いがずれてしまい、資料選択について考え直さなければいけないこともあった。半期の計画の流れも立てたものの、毎回の進度によりそれを調整しながら次の週の内容を変更しなければいけない時もある。頭を抱えることも、M2同士の意見が一致しない時もあった。

だがそれ以上に、自分たちで企画する木曜カンファレンスにやりがいを感じている。そして、仲間と協働して新しいものをつくり上げるということの良さを直に感じている。先生や仲間へ感謝しながら悔いのないよう貪欲に学び続け、どんどん新しいことに挑戦していきたい。

院 生 紹 介



福井県立嶺南東特別支援学校

河端 稔

今年度、教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました河端稔です。京都府の特別支援学校〔京都府立中丹支援学校／京都府立舞鶴支援学校〕で5年間勤務した後、4年前に地元福井県に戻ってきました。現在の嶺南東特別支援学校は、今年で5年目です。これまで

のほとんどを研究部員として取り組んできました。そのおかげで、全国各地の先進校といわれる特別支援学校を視察する機会をいただきました。富山大学附属特別支援学校、徳島県立国府支援学校、筑波大学附属久里浜特別支援学校、金沢大学附属特別支援学校、千葉大

学附属特別支援学校…。これらの先進校の研究方法をモデルにしながら、自校でも指導法の改善に取り組んできました。授業づくりに関する研修会にも積極的に参加してきました。その中で、2年前に参加した福井県特別支援教育センター主催の専門研修「授業研究リーダー研修会」は、私の中で今までに学んだことのない実践的な研修会でした。その研修会は、学校拠点方式の研修で、特別支援教育センターの先生や福井大学教職員大学の先生方が伴走者となり、研修者である私と一緒に学校改革に取り組んでいただきました。松木先生、笹原先生、小嵐先生の一言、一言が勉強になり、新たな発見の連続でした。学び続けたい。今、途切れると一生後悔すると思い、この度、教職大学院に入学する決意をしました。この2年間は、きっと私の教員生活の中で、ターニングポイントとなるように感じています。たくさんの先生方との出会いを大切に、貪欲に学びたいと思いますので、よろしくお願ひします。



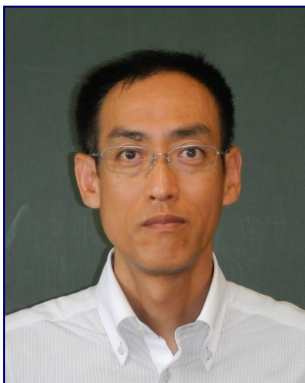
福井県幼児教育支援センター 観 寿子

私は、平成26年度から、福井県幼児教育支援センター（福井県教育庁義務教育課幼児教育支援グループ）に勤務しています。幼児教育支援センターは、平成24年11月に開設された比較的新しい県の機関です。ここでは、保育所・幼稚園・認定こども園といった校種や、公立・私立という枠を越えた福井県全体の幼児教育力向上のための事業や、保幼小接続のための事業を行っています。これらの事業には、子どもの「学びに向かう力」を育てつなげるという共通の柱があります。幼児教育支援センターでは「学びに向かう力」を、「友達と共通の目的に向かって、子ども自身が主体的に遊び・活動を発展させていく力」と定義して、平成27年3月に「学びに向かう力」を育むための「福井県保幼小接続カリキュラム 確定版（学びをつなぐ希望のバトン カリキュラム）」を策定しました。そして、今年度は、このカリキュラムの実践普及に向けた幼児教育研修をスタートさせました。

平成25年度までずっと小学校に勤務していた私は、県の幼児教育を支援するという仕事をすることに対し

て、とても不安でした。しかし、未知の分野で働くことになったからこそ昨年度1年間は、たくさんの新しい出会いと、これまでの自分の小学校教員生活を客観的に見る機会をいただきました。

私の1年前から幼児教育支援センターで勤務されているS主任は、小学校でも幼稚園でも勤務経験のある方で、まだ土の中の種だった私にとってS主任からお聞きする話が「幼児教育」の日光であり水でした。こうして芽をださせていただき、センターがカリキュラムを作成するにあたって、多大なご指導・ご助言をくださった白梅学園大学の無藤隆先生や、福井大学の松木健一先生、岸野麻衣先生から何度もお話をお聞きすることができたことは、高級肥料をいただいた感じでした。「学びに向かう力」を育てつなげていくことは、21世紀を生きる子どものためにとっても必要なことだと知りました。また、県内外の研究会で見た保育や授業での生き生きとした子どもの姿が、そのことを実感させてくれました。「学びに向かう力」を育む授業ができる自分になりたい。福井の子どもが「学びに向かう力」をつけて欲しい。そのために幼児教育支援センターでできる限りの支援をしたい。これらの願いを実現するために頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。



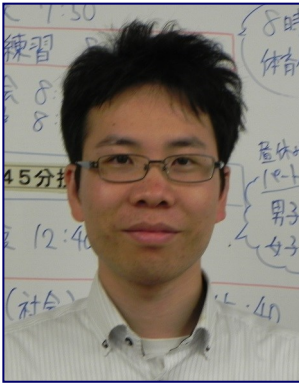
鯖江市鯖江中学校 茨田 隆徳

今年度より福井大学教職大学院に入学した茨田隆徳です。現在は鯖江市鯖江中学校に勤務しています。専門教科は理科（物理）で、これまで小学校1校中学校4校と勤務してきた中で、より分かりやすい理科授業の実践、理科が好きになる生徒の

育成などを目標に自分なりに実践を重ねてきました。幸いにも学校内の同僚はもちろん、学校を離れても授業づくりを語り合える多くの友人に恵まれ、実践を深めることができました。今回、教職大学院への入学を考えるようになったのは、数年前から元福井大学の石井恭子先生が中心になって「現場の先生方と協働で研究を進めたい」と立ち上げられたActive Learning研究会にお誘いを受け、何度か顔を突き合わせて頂いたことがきっかけです。この頃の自分は教職経験も20年を過ぎ、毎日の学級担任の業務や部活動指導に加え、中堅教員として徐々に増えつつある校務の多忙さに、経験で身につけたルーティンをひたすらこなすことで日々を乗り切っているという状況で、自分自身のステップアップが必要と感じながらも時間的な余裕がなく悶々としていることが多かったように思います。こんな中、久しぶりに大学の建物に入り研究室の空気を吸い、研究会の中で若い先生や学生と語り合うことはとても新鮮な経験でした。自分の授業実践をより

深く省察するきっかけになりました。教師自身が新しい知見を学び続けることや、自分たちの実践をふり返り省察することが、よりよい授業や学校をつくることにつながるのではないかと思います。

今現在勤務している鯖江中学校について、少しご紹介したいと思います。私は今年で勤務6年目になりますが、この間本校はめまぐるしく変化してきました。鯖江中学校は生徒数が800人を超える県内屈指の大規模校です。部活動に大変熱心で、生徒たちは毎年多くの運動部や文化部が県大会などの上位の大会に出場するなど活躍をみせてくれています。職員数も50名を超え、職員室にも生徒たちに負けない活気が溢れています。今年は、「生徒が主役の学校づくり」とテーマを掲げ、教職員が一丸となって取り組んでいます。生徒会活動もどんどん活発になってきており、今年の5月には「ハイタッチあいさつ運動」が行われ登校時間の玄関先が賑やかで和やかな空間になるなど、笑顔溢れる学校になっています。しかし、数年前には大変荒れた時期もありました。毎日生徒指導上の問題が起き、その度に先生方が奔走していました。こういったことが二度と起きないように多くの先生方や生徒たちの力によって、現在のような授業にも部活動にも前向きな活気のある雰囲気をつくりあげてきました。また、研究面においては、昨年から取り組み始めた授業のユニバーサルデザイン化を目指し実践を重ねていますが、まだまだ道半ばといったところですが、これからの教職大学院での学びが、より分かりやすい授業づくりや「生徒が主役の学校づくり」を目指していくための一つの礎となるように、研鑽に励んでいきたいと考えています。



福井市足羽中学校 神部 浩平

今年度から教職大学院のスクールリーダーコースでお世話になることになりました、神部浩平と申します。よろしくお願ひします。

昨年度までは長野県にある長野市立東部中学校という、在校生徒数800名以上の大規模校で勤務していました。去年が東部中学校で4年目の勤務であり、担任として3年生の卒業を見守る一年間を過ごしました。自分の乏しい経験の中でも、教師の『やりがい』や『大変さ』がもっとも感じられた一年になりました。その実感から、自分自身の授業をつくる力、生徒指導をする力、また社会人としての知識や経験そのものも、まだまだ足りないと感じるようになりました。

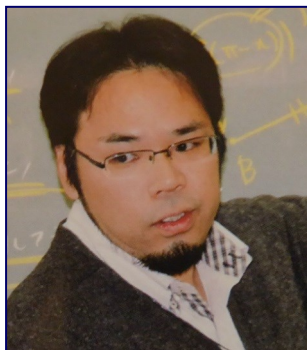
教職大学院のことを知ったのはそんなころでした。派遣教員として福井の中学校に勤務しながら、教職大学院で勉強する…大学院どころか福井にも行ったことが無かった自分にはまったく想像の出来ない世界でした。しかしながら、知らないからこそ、自分に足りないものを学ぶ場があるはずだと確信しました。

今年度の勤務校は福井市足羽中学校です。周りの先生方に大変よくしていただき、この4月、5月の2ヶ月で

かなり慣れることが出来たと思っています。もっとも驚いたことは、先生方の指導の手厚さでした。課題の提出では全生徒が出し切れるように声掛けや個別指導を徹底されています。生徒指導でも、粘り強く時間をかけて指導をされていました。先生方の情熱を受けて、生徒たちにも当たり前前に頑張る姿勢が身につけているのだと感じています。

そのような環境の中で学んだ福井の中学生は、学力・体力ともに全国トップレベルにあります。長野県からの派遣教員として福井教育の良さをたくさん持ち帰ることができればと考えています。現場での実践を重ねると同時に、幼保小中高の連携を重視した18年型教育や、授業名人などの研修システムを学び取りたいと思います。教職大学院ではその学びを深め、発信できるような形に練り上げていきたいです。4月・5月のカンファレンスでは教科や校種を超えた何人もの先生から経験談や考えを聞くことができました。福井を深く知る上でも大変参考になりましたが、『今日から実践しよう』と目が覚める話題がいくつもありました。自身の教師力向上のためにも、先輩方の実践を学んでいきたいです。

県外派遣教員と教職大学院生、どちらか1つでも貴重な機会を、2つ同時に取り組むことになりました。この幸運と自分を支えてくださる皆さんに感謝しながら、限られた時間を大切に、何にでもチャレンジをと決意しています。2年間よろしくお願ひします。



奈良女子大学附属中等教育学校 佐藤 大典

福井まで3時間。サンダーバードから降りた瞬間、冷たい風と爽やかな空気が心と体に伝わってくる。1週間の疲れが吹き飛ぶようだ。えちぜん鉄道に揺られること約10分、車窓から福井大学の姿が見えてきた。「今日は何をする

のだろう」、大きな期待と少しばかりの不安がよぎる…。

大学卒業後、すぐに奈良女子大学附属中等教育学校(当時は文学部附属であった)に赴任した。最初の10年間は、右も左も分からず、ただがむしゃらに仕事をした。1年(中学1年)から6年(高校3年)までの担任を経験した後、何度か卒業生を送り出すことができた。SSHなどの運営にも関わり、公開授業なども行った。

教員生活10年目が過ぎようとしたとき、突然奈良県との人事交流の話が舞い込んできた。少し悩んだが、「外」の世界を知りたいという思いが強かった。奈良県立橿原高等学校に赴任した当初は、附属との「文化」の違いに戸惑い、他の先生方についていっただけで精一杯であった。

徐々に慣れてきた2年目、軽音楽部の主顧問になった。休日も盆もクリスマスもなく、ひたすら部活動指導

に明け暮れる毎日であった。通勤に片道2時間を要するということもあり、体は辛かったが、充実した日々を送ることができた。その後、再び現任校に戻って、今年で4年目となる。

福井大学教職大学院のことを知ったのは、昨年の秋である。当時、久しぶりの1年の担任をしており、クラスのさまざまなトラブルへの対応に四苦八苦している毎日であった。正直、担任としての自信を失いかけていた。そんな中、同僚のS先生から「これを読め」と紫色の冊子を手渡された。福井大学教職大学院の入学願書だった。必死だった。これまでの自分を見つめ直したい、藁にもすがる思いでその冊子に手を伸ばした。

この教職大学院で学びたいことは2つある。1つは低学年の指導方法である。十数年前に低学年の担任を経験したが、当時の生徒と比較して、生徒を取り巻く環境が大きく変化しているように感じる。特に生徒指導に関して、「個」の対応が必要な状況が多くなってきている。どのように指導していけばよいのか、具体的な事象を通して検討していきたい。

もう1つは、教員生活15年間の振り返りである。この15年間、目の前の「課題」に終われ、じつくりと振り返ることができなかった。教職大学院での学びを通じて、これまでの15年間を見つめ直していきたい。そして、ミドルリーダーとしての「次の15年間」に繋げていきたい。

奈良女子大学附属中等教育学校 塩川 史



本年度より拠点校となった奈良女子大学附属中等教育学校から、福井大学教職大学院で学ぶため、福井に通い始めて3か月が経とうとしている。まだ雪が残っていた4月、桐の花が咲き早くも田植えが始まっていた5月。サンダーバードに向かって

手を振る沿線の子供たち、垣間見られる人々の暮らし。福井を往復する車窓から目にするものは、どこか何やら懐かしい。それは久しぶりに学ぶ身になった自分への郷愁もあるのだろうが、いつもの生活空間を離れることの意味を改めて感じるのである。少し前にたまたま聞いていたBBCの番組で、優秀教員の賞を受けたウェールズの女教師が、“Teaching is a lifestyle, not a job”と言っていた。教職は日々の生活そのものなのである。だから日常を離れ、教える立場を離れることだけでも、新たな視座を得ることができる。

実践記録、資料を読み文章にまとめて伝える一ヶ月間カンファランスで、その地味な作業を重ねて変わったことがある。それは自分の実践、同僚の実践を客観的に、ていねいに見るようになったことだ。目の前をどんどん流れて行ってしまう現象を、ことばで表現しようと試みている自分に気がつき、そして一部を実際に

記録してみることにした。すると、漠然とした直観として感じていたことも、記録者の視点から客観的、分析的に捉えてみると、さらに深く感じられ、大きなプロジェクトでなくとも、毎日の小さなエピソードが、なかなかどうしてたいした実践なのだとわかった。

教職大学院では、一人では体験しようもない多様な学校を「体験」できる。色々な学校の事情に触れ、考えさせられることが多い。異校種、異なる背景を持つ学校の先生がたから直にお話を伺うと、教師のあり方 -- professionalismについても考えさせられ刺激的である。当初、教師ばかりの集まりとは、どれほどまでに不気味なものであるかと警戒さえしていた。しかし、スクールリーダーの先生がたは、驚くほど教師「くささ」が鼻につかない。それは小さなうれしい発見であった。役割に吞まれ自身を失うと「〇〇くさく」なるものらしいが、自分の「型」から自由で、自らの変革に挑戦されているからなのであろう。

さて、現在の勤務校では、入学適性検査を経て入学した生徒がtest-orientedで知識を得たがり、結果がすべてだ、という生徒が増えてきたような気がする。教師は、「なぜ学ぶのか」、という生徒の問いに答えられなければならない。学ぶことは学んでいるものからしか学べないという。果たして私は教職大学院スクールリーダー養成コースで学ぶことで、生徒に学ぶことの意味を、身をもって示せるのであろうか？ 日常の仕事に追われる毎日だが、福井での非日常の学びの機会を大切にしたい。



今年度、スクールリーダー養成コースに入学しました。こうして、教職大学院で学ぶ機会をいただいたことに、深く感謝しています。私は、新採用から7年間、特別支援学校に勤務し、その後小学校に異動しました。現在は、坂井市立高椋小学校に勤務しています。

特別支援学校に勤めた7年間では、知的発達に遅れのある児童生徒、病弱、肢体不自由の児童生徒の支援・指導を経験しました。いずれも、一人もしくは数人を担当する少人数での環境で、一人一人の能力や身体状況に応じて、支援の手立てを工夫しながら関わってきました。先輩の先生方から教わったり、研修を通して学んだりしたことの中で、最も大事にしてきたことは、「子どもの側に立って考えてみる」ことでした。特に、言葉を発することができない子との関わりでは、いかにその子の意志をくみ取るかが大事で、ちょっとした動作や小さな様子の変化も見逃さない目をもつことが求められました。そういった経験の中で、「子どもの側

坂井市立高椋小学校 名倉 康浩

に立って考えてみる」というスタンスが自分自身に染み込んできました。

小学校に転任してからも、「子どもの側に立って考えてみる」ことを忘れないように心がけてきました。その中で、児童の様子の変化と共に、学級経営の困難さが増してきているようにも感じています。発達障害を抱える子への対応や支援を要する子を含めた全体への指導もその一つだと思います。そして、指導の困難さが増してきているということは、私たち教師の指導力の向上（スキルアップ）が求められていることだと考えます。「子どもの側に立って考えてみる」ことを続けながら、児童理解、子どもを見取る目を大事にしていきたいと思っています。

今年度私は、研究副主任を担当し、校内研究の推進に取り組んでいます。また、数年前から、研究部が計画する校内研修とは別に、『自主研修』という名称で、希望者を募って、研修会を実施しています。そこには、テーマに関心をもった者同士の小集団ができ、前向きに学ぶ雰囲気生まれ、とても有意義なものです。こういった研修を多くの職員と共に行い、学び合える研修をしたいと思っています。これから教職大学院で学びを深め、勤務校の研修や子どもたちのためになる実践に繋がりたいと思っています。



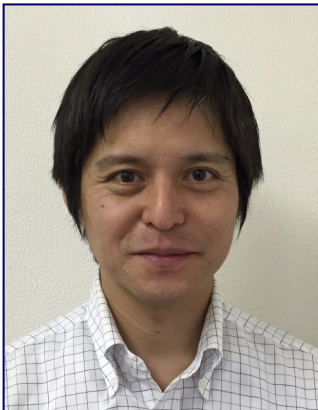
みなさん、こんにちは。この春から母校の敦賀市立気比中学校に勤務しながら、大学院でお世話になることになりました浜上と申します。母校での勤務は教員になってから初めてで、正直最初は懐かしさでいっぱい

でした。自分が3年間過ごした学舎に、今は私の後輩となる生徒たちがいて、楽しそうに学校生活を送っていること、そんな光景を毎日一番近くで見られること、とても嬉しく思っています。中には、その当時同級生だった人のお子さんもいて、不思議な気持ちになることがあります。こうしたさまざまな思いを持ちながら勤務できるのは、本当に幸せなことだと感じています。そして、それだけ年月は流れたのだと実感しています。現在、私は中学1年生の担任をさせていただいています。その一方で、教職大学院でも本年度より入学した1年生、同じ1年生である生徒と私だからこそ、同じ「学生」として分かり合える、話し合えることがたくさんあります。また、私自身は教員であると同時に学生でもあるので、これまでとは違った思いで、この仕事を捉えることができるようになったと感

敦賀市立気比中学校 浜上 千恵

じています。今はまだ、学校での勤務と大学生という2つのことを両立させていくことだけで精一杯ですが、こうして今、大学院で学ばせていただけるということに日々感謝しながら、これからの2年間を頑張っていきたいと考えています。私は自分自身が中学1年生だった時に、今の勤務校で将来の夢を見つけました。「中学校の先生になりたい」と思えたのは、その当時に出会った先生方が、お一人お一人とてもすてきな方ばかりだったからです。私にとって、その3年間は本当に大切な時間でした。あの時出会えた先生方に近づくことは、決して容易なことではありませんが、常に学ぶ姿勢を忘れず、これからは後輩である生徒たちの夢を支えられる先輩として努力していきたいと思えます。今年度、教職大学院に入学できましたのも、何かの縁だと感じています。たくさんの方のサポートをいただきながら、今なお学び続けられることに感謝しつつ、一日一日を大切にしていきたいと思えます。

まだまだお伝えしたいことはたくさんありますが、限られたスペースにすべての思いを表現することはまだまだ苦手の私です。こうしたことも含めて、教職大学院では、自分の思いをしっかりと表現したり、書いたりすることができるよう、勉強していきたいと思えます。教職大学院の関係者の皆さま、そして院生の皆さま、これからの2年間、どうぞよろしく願いいたします。



「もしかしたら、あなた病気（発達障害）じゃないかって保育園や小学校の先生に言われたことがあるよ。」

そう母親に言われたのは、教職員に採用されて間もなくの頃だった。確かに、実に落ち着きがない子どもで、飛び出して交通

事故に遭い半死半生になる、池や用水路に落ちて溺れそうになる、忘れ物はする（ランドセルをかつぎ忘れて登校することもあった）。当然、勉強は全く理解できない。通知表渡しでは、「なぜ、お子さんが、勉強が分からないかが分かりません。」と当時の担任から告げられる始末。子ども心に、「なぜ、自分は他の人と同じようにできないのだろう。」と悩んでいたことが思い返された。しかし、その体験が、無意識の内に深々と根を張り、困っている子に寄り添える教師になりたいという願いを心の中に育てていったように思う。

小浜市立口名田小学校 正木 啓敬

現在、気がかりな児童も含めた、全ての児童が参加できるような協同的な「学び合い」の授業の創造を目指している。勤務校でも研究方針に沿いながら、「わからない」「どういうことだろう」という子どもの困り感を引き出し、授業に活かすことを心がけている。しかし、実際の授業では、「わからない」という児童の素直な思いから学びが始まることはごくまれである。それらを踏まえ、「学び合い」を支える「子どもの事実が見えるようになること」、「子どもの学びを生み出すために教材分析を深めること」「子ども同士のつながり、考えのつながり、題材とのつながりが見えるようになること」を、教職大学院で深く学びたいと考えている。もう一つ学びたいことは、協同的な学び合いを成立させるための土台となる教室文化（仲間作り）についてである。「わからない」「できない」ということを子どもが発言することは、ともすれば、劣等感を引き起こす。その辛さを乗り越え、新たな学びを生み出すためには、仲間の存在が不可欠である。「仲間づくり」と「学び合い」とが結び付いた教室文化をどのように作り上げていくかを研究したいと思う。

教職大学院で学ぶ機会を与えて頂いて本当に感謝している。研究成果を勤務校・地域、そして困り感を抱える子ども達に還元できるよう、真摯に学びたいと思う。

スタッフ紹介



福井大学教職大学院・特命教授

小嵐 恵子

小嵐恵子です。教職大学院にお世話になって一年が過ぎました。その間、様々な授業を見学し、また様々な人からの実践の話を聞いてきました。その時、私は何を伝えるかをあらかじめ考

えているわけではありません。その都度、相手が何を聞きたがっているのかを考えるようにしてきましたが、そのことがうまくいっているのかはまだ疑問があります。

授業を見ていると、教師が子どもたちに期待している事柄がよくわかります。同時に、子どもたちも教師が自分たちに何を期待しているのかを読み取ろうとしていることが、子どもたちの行動の端々から読み取れます。

振り返って、自分自身が授業を受けてきた子どもの頃を考えると、やはり教師に合わせようとしていた事実があります。小学校時代、私は先生に指名されて発表することが嫌いでした。なぜ嫌いだったのかは、思い出せませんが、先生の問いの答えが分かっている、手を挙げませんでした。しかし、例外はあります。研究授業と時と、父兄参観日です。この日は先生はいつになく、おしゃれをしていましたし、言葉遣いもやさしかったです。先生の特別な日には協力しないといけないという雰囲気が教室に漂っていました。

中学校になると、話し合い活動のある授業がありました。国語では、段落をいくつに区切れるのか、作者は何を言いたいのかを、グループで話し合いをさせられました。話し合いは、やはり好きではありませんでしたが、先生の問いに対してどのように答えると先生が満足するのかを次第に会得することができました。それは先生が黒板に書き込んだり、指導書に書き足している様子から理解できました。これが分かると、話し合いはスムーズになります。先生が期待している方向で話し合い活動を進めました。

体育でも話し合い活動がありました。ダンスの課題になると。グループで話し合っ

てダンスを創作する活動が好きなんだと、思ったことを覚えています。先生のアドバイスに従って、グループ発表をしましたが、先生はとても満足そうでした。

高校になると、ほとんどの先生の期待は読み取りにくくなりました。単調な講義式の授業では、聞きたくなければ寝ていていいという意図だと思ひ、内職をしました。話巧みに引き込もうとする先生には、その期待に添って聞いていましたし、笑ってもいたように思います。高校では、めったに発表する機会がありませんでしたが、唯一古典だけは違っていました。毎回質問され、答えられなければ、その場で立たされます。席順であてられるものの答えられなくて、クラス全員が立たされる羽目になると、先生はしてやったりと本当に嬉しそうでした。その嬉しそうなお表情を見るのが悔しくて、予習をするようになりました。先生の策略にはまったことは感じていましたが、予習を怠ることはできませんでした。

大学でどのような期待が私たちに向けられていたのかについては、ここでは省略します。福井大学出身ですから、答えられないというと、教官の期待感をどのように読み取っていたかが分かってもらえると思います。

人は、聞き手になっても、話し手になっても、相手が何を求めているのかを探っているものだと思います。一方的に話すのでもなく、また、感慨もなくただ聞いているのでもないと思います。相互に相手を理解しようとしている。そのことを今一度自覚しながら、授業実践を見学し、カンファレンスに参加したいと思っています。どうぞよろしくお願いします。



研究集会・公開研究会の報告

新潟大学教育学部附属長岡校園 平成27年度教育研究協議会

2015.5.27

福井大学教職大学院・教授

森 透

去る5月27日(水)に新潟大学教育学部附属長岡校園の公開研に小林和雄先生、風間寛司先生、附属中の草桶先生と参加してきました。交通の便は必ずしもよくはなく、前日夜の18時30分にJR福井駅発の特急に乗り、金沢駅で北陸新幹線、そして在来線の特急に乗り換えて22時頃に長岡駅に到着しました。約3時間半の旅でした。長岡市内では風間先生が数学の学部生・院生を引率され懇親会をしていましたので、それに合流させていただきました。探求ネットワークをやっていた学生も多く楽しいときを過ごしました。

翌朝、附属中の草桶先生も同じホテルでしたので3人でホテルからタクシーで学校に向かいました。長岡校園は幼稚園・小学校・中学校の3つがあり、ここ10年以上も公開研は同日開催ということを知り、すごい歴史だなあと感銘しました。「社会的な知性を培う」を研究主題に掲げて、文科省の指定を平成22年度から(第1次研究)、また平成25年度から受けて、幼小中一貫教育の研究を続けています。

私は現在幼稚園長ということもあり、附属幼稚園に張り付いて参観しました。第1に強調したのは男性教諭の存在です。年長クラス担任の松井陽一先生は素晴らしい先生でした。人数は20名でしたが、先生は「自由遊び」の中で忙しく走り回りながら、一人ひとりの子どもの様子や発言を丁寧に受け止め、しっかりとした対応をしていました。福井の附属幼稚園も同じですが、男性教諭も同じことが出来るという感動でした。第2は園庭の広さとダイナミックスさです。森があり、築山も高さ約5メートルで、登る

だけでも大変です。上からすべるのもダイナミックで、見ていて少し怖い感じもしました。園庭は大きく2つあり、年長組が森と築山の園庭、年中・年少組は遊具のある少し小さな園庭で遊んでいました。子どもたちが一緒に園庭で遊ぶこともあると思いますが、異年齢での学びが実現できる環境だと思いました。第3は「自由遊び」のあとのクラスでの活動です。ホールで歌やゲームをしました。先生はテンポよく、子どもたちと一緒に楽しんで活動していました。

分科会では、最初に担任の先生の自己紹介があり、以前附属小を経験し、それから附属幼稚園に来られたと話されていました。幼稚園に来て、それまでは芋虫と毛虫が絶対に嫌いでしたが、子どもたちと同じ遊びに徹するために「克服」したと、しみじみと語られました。やはり腹を据えて取り組むと人間は変わるものだなあと感じました。

講演会は文科省初等中等教育局視学官の津金美智子氏の「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方」でした。語りも柔らかく、内容も非常に具体的でした。

今回初めて参加しましたが、長岡校園が10年以上も公開研を同時開催しているという事実に驚きました。幼-小-中の12年間でどのようにつながり、3校園の先生方がお互いに学び合い、日常的にどのように実践を語り合っているのか、認め合っているのか、そしてそれぞれの実践に活かしているのかをもっと具体的に知りたくなりました。福井大学の三位一体改革にどのように活かせるのか、また機会があれば参観してみたいと思います。

カリタス幼稚園公開保育・カリタス小学校公開授業 と 研究会

2015.5.28 - 29

福井大学教職大学院・教授

森 透

去る5月28日(木)に、この4月から教職大学院の拠点校となった川崎市にある私立カリタス学園の幼稚園の公開保育と研究会があり、翌29日(金)

には小学校の公開授業と研究会があつて、両日も参加させていただきました。幼稚園には大学から松木先生、山崎先生、稲井先生、玉川大学の石

井恭子先生、私の5名が参加し、小学校には稲井先生以外の先生方が参加しました。

私は以前小学校の公開研に参加したことはあるのですが、幼稚園は初めての参加でした。9時に幼稚園に集合し自由に参観させていただきました。モンテッソリー教育を熱心に取り入れている幼稚園で、9時から10時30分までの1時間30分がモンテッソリー教育の時間で、各教室で子どもたちは机の上や床の上で教具を使って、日常生活の練習、感覚、数、言語、文化の5つの領域で学んでいました。私もあるクラスに入り一緒に遊びましたが、朝から、身体全体ではなく頭を中心に使う知的な活動は、小学校の授業のような感じももちました。幼稚園で一人ひとりに机と椅子があるのは小学校と同じように思いましたが、福井大学附属幼稚園ですと、9時から10時すぎまでは、身体全体を使って思いっきり「好きな遊び」に没頭する時間です。クラスを解いて異年齢で自由に遊ぶことを大事にしていますので、カリタスのモンテッソリー教育の意義について、考えたいと思いました。今回の幼稚園参観には初めてカリタス小学校の先生方も来られました。とてもすばらしいことだと思いました。

モンテッソリー教育のあとは、園庭で思いっきり遊ぶ時間でした。子どもたちは主に鬼ごっこやかけっこで発散しているように感じました。ブランコやうんてい・ジャングルジムなどの遊具で遊んでいましたが、砂場はあるとのことでしたが登場していませんでした。どうしても福井の附属と比較してしまうのですが、この時期の幼児らしい、身体全体を使った様々な遊びがあまり見られなかったようにも思いました。外で遊ぶこと、園庭で遊ぶことが、発散の場ではなく、ものをつくること、何かを創造することにつながると思いなあと思いました。クラスでの活動では歌をじっくりと聴くことができました。心が静まるような、感動する歌でした。先生も自然体で子どもたちに接していました。

研究会は初めて幼稚園と小学校の先生方が合同で開催されました。幼稚園のいいところがいっぱい出されたように思いました。「遊びから学ぶ」ということとモンテッソリー教育との関係は、これから考えていきたいテーマだと思いました。私はこの4月から附属幼稚園長になった関係もあり、いろいろと学ぶものが多かったように思いました。

翌日の29日(金)は小学校の授業参観と研究会でした。午前中は自由参観で、幼稚園の子どもたちが小学校を訪問し交流が生まれていました。2年生のクラスを突然訪問し、羊毛で活動している2年生から幼稚園児はいろいろと教えてもらって

いました。2年生は突然の訪問客でしたが、お姉さん、お兄さんとして張り切って対応していました。担任は院生の小野先生でしたが、突然の来客を大歓迎でニコニコしながら対応されておられました。

午後の授業は共同で2つの授業を参観しました<①5年1組・国語(長島先生)・37名、②6年2組・社会(程島先生)・36名>。2つの授業とも子供たちの座席表も含めて詳細な事前資料が配布され、日常的に授業研究を深く継続して取り組んでおられることがよくわかりました。①の国語の授業は単元名「筆者の考えをとらえ、自分の考えを発表しよう」で、教材名は「見立てる」「生き物は円柱形」。説明的文章の中身を理解して、その筋たてをとらえることはなかなか難しいと思いましたが、子どもたちは積極的に発言していました。②の社会科の授業は、単元名「天皇中心の国づくり～奈良見学に向けて～」で、修学旅行前の子供たちが奈良宿泊に向けての1時間目の最初の授業でした。最初機械のトラブルもありましたが、子供たちがしっかりと先生をサポートしており、5年生からの持ち上がりクラスで先生が子供たちに大変慕われていることが感じられたクラスでした。社会科の楽しさ、歴史の面白さ、そして石造の謎を追う中での太古のロマンに触れる喜びなどを先生は意図されていました。

授業研究会は2つに分かれて行われ、付箋紙を使い、よかった点、気になった点、改善点の3つを自由に書き出し、模造紙に貼り付けていきました。私は社会科の授業研究会に参加させていただきましたが、程島先生のお人柄が紹介され、ますます親近感をもちました。授業は「奈良宿泊活動を楽しもう！」で、お題は「謎の石造を追え！」でした。子供たちが自由に当時の歴史や人々の生活に思いをはせる様子が紹介され、自由な発想がいろいろと出された授業が良かったのではないかと話されました。

最後の全体研究会は指導者の小林宏己先生(早稲田大学)と授業者のお二人が前に並んで行われました。今までも何度か参加して感じていることですが、率直に言って、最後の全体研究会は人数が多いこともあり、どうしても一方通行になってしまうなあと思いました。分科会が少人数でじっくりと話されて闊達なコミュニケーションが行われていることと比較して、そのギャップを若干感じました。全体会もその2つの分科会のクロスが出来ないかなとも思いました。授業をされたお二人の先生が最後に一言ずつ話されるのですが、「今日の授業をやって本当によかった！」と思える授業研究会が理想ですね。

カリタス女子中学高等学校公開授業 と 研究会

2015.6.24

福井大学教職大学院・教授

森 透

先日の6月24日（水）にカリタス女子中学・高校を訪問した。すでに5月28日（木）にはカリタス学園附属幼稚園、29日（金）には附属小学校を訪問し、授業参観と研究会に参加させていただいている。これですべてのカリタス学園の参観ができたことになる。院生の黒瀬先生の話ですと、中学校は熱心な先生方が多く、授業も専門性が高いので、なかなかお互いの授業交流が難しいということであった。当日は黒瀬先生が自ら授業を公開し、高校1年生の物理の仕事エネルギー単元を取上げ、実験を採り入れた大変面白い内容であった。スズの粒500グラムが入った袋を1メートルの高さから落として、袋の温度の変化とエネルギーの関係を調べる実験であった。生徒は実験を通してエネルギーのことが具体的に分り、教科書だけでは学べない内容の授業であったと思う。私は、黒瀬先生の空き時間を利用して、自由にほかの先生方の授業を参観させていただいた。たまたま私が参観させて頂いたのは、2時間目の水島先生の世界史（フランス革命とナポレオン）、7時間目の加藤先生の地理であった。社会科の授業はお二人とも基本的に一斉授業であったが、生徒数は

20名程度で少人数であった。「アクティブ・ラーニング」が話題にのぼっているが、この社会科授業は生徒達が非常に集中して聴いていたこと、先生の発言に反応して頭を使って思考していたことが窺われた。先生の冗談にも笑いがおこり、お二人の先生とも生徒達に慕われていることが見て取れた。受験も控えているので、講義と板書とノートへの写しが中心の授業であったが、1年間の単元の中で、一つでもいいので、探求的な活動を取り入れた授業（例えばグループワークや発表会など）を実践したら、生徒達は一生懸命取り組むのではないかと考えた。それだけの力を持っている生徒たちだと思った。

夕方は1時間程度の全体研究会であった。中学高校の先生方はほとんど全員参加、それに幼稚園・小学校の先生方も自由参加をされていた。大きな部屋にカリタス学園の幼稚園から高校までの先生方約100名一同に会したことは初めてのことであり、歴史的な日であったと思う。このような取組みをこれからあせらずに、じっくりと協働して進めていけたらと考えている。

修了生コーナー

特別支援ゼミへの参加 修了後の一年のふりかえって

福井県立奥越特別支援学校

堀江 春那

「教師として軸となる何かを見つけない」と思い、入学した教職大学院は、私にとって濃密な2年間だった。重複障害のある生徒とのかかわりや授業実践、様々な方たちとの語り、自分に徹底的に向き合う報告書の執筆…それらすべてが私を成長させてくれたと感じた。そして「子どもの声を聴き、“ことば”を伝える教師」を報告書のタイトルとして、2014年3月、私は教職大学院教職専門性開発コースを修了した。

2014年4月、福井県立奥越特別支援学校で勤務が始まった。それまでかかわっていた重複障害のある子どもとは違う行動をとる子ども達、指導すべきこと、教師の役割…色々なことが教職大学院での実践のときとは違い、混乱と迷いの日々が続いた。子どもが思うように行動してくれないことに苛立ち、子どもの前で泣きそうになってしまったこともあった。自分の中の常識が崩され、立て直すために私の支えになったのは、教職大学院で知った「振り返り」であった。幸い、副担任

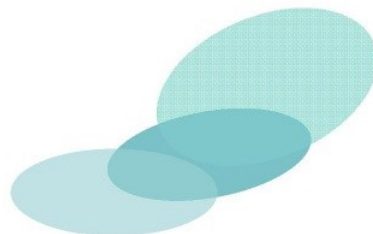
の先生方も話し合いを重視してくださったこともあり、放課後は毎日のように話し合った。また、記録に子どもの様子や自分の考え、思いを吐き出しながら頭の中を整理していった。

2学期に入り、混乱と迷いは少しずつ落ち着いていき、私と子どもの間にもある程度のリズムができてきた。その一方で、子どもが以前はできていたことをしなくなったり、私の声掛けに怒るような返事をしたりするとき、「私の指導が甘いからではないか」「もっと厳しくしなければいけないのではないかと不安に駆られることがあった。その不安から注意することを増やすと、子どもは更に反発し、お互いにモヤモヤしてしまうような状況にもなった。そのように自分の方向性が見えなくなったとき、私は特別支援ゼミに行った。特別支援ゼミは月に1~2回、福井大学で開かれるゼミで、教職大学院の先生や院生、現職の先生方など6~7人が集まる場である。ゼミでは、主に「心理学的行動図(梅津八三, 1976)」という著書をみんなで具体例を挙げながら読み解いたり、院生の実践報告を聞いて互いに理解を深めたりしている。このゼミでは著書や他者の実践が鏡になり、自然と自分の実践を振り返ることができた。そして毎回考えさせられた…「子どもの『声』を聴いているか」と。子どもの行動の意味を考え、その行動に表れる子どもの思いを想像する…。すると、私が教職大学院で学び、大切にしたいと思ったことは、「怖いから言うことを聞く」というような厳しさではなく、やりとりをしながらよりよい形に向かっていくことだったと思い出すことができた。そして、気持ちを新たに、子どもとのやりとりを重視した実践に向かうことができた。

このようなことはたった1回の出来事ではなく、昨年度、何度も繰り返したことである。そし



て、今年度も不安になってばかりである。同じことを繰り返しているようで落ち込むこともあるが、教職大学院在学中に先生方に言っていた「同じことを繰り返しているようで、少しずつ変わっている」というお言葉を胸に、少しでも子どもの大切な時間をよりよいものにするため、今後も学び続ける教師でありたい。



◇◆ 研究紀要・実践報告書の紹介 ◆◇

「学びを拓く学校づくり」

信州大学教育学部附属松本中学校 44-48集

福井大学教職大学院・准教授

宮下 哲

私が初めて福井ラウンドテーブルに参加したのは、平成16（2004）年の3月だった。それから10年、私が福井の地で、これまでとは異なる場で教育実践することになるとは思ってもみなかったが、当時の信州大学教育学部附属松本中学校の実践に鑑みると、浅からぬご縁を感じる。

平成12～16年度の松本中学校では、全校研究テーマを「学びを拓く学校づくり」（初年度と2年次は「子どもが学びを拓く学校づくり」）として、「必要感に根ざす探究的な学び」を実現しようと実践を積み重ねていた。

具体的には、表1のように、生徒自身が学ぶに値する切実な問いをもち、それを自分なりに解き明かしていくこと、そして、学びがつながっていく実感をもてるようにしようと努めていた。そのような実践の蓄積の過程で、必要感に根ざす探究的な学びの実現のためには、表2にあるような教師の構えが必要であることも明らかになってきていた。

このような研究の視点は、生徒の具体的な学びの姿を記録し、その事実を解釈するとともに、捉えた事実の累積をもとに、長いスパンで事実の解釈をし続けながら、生徒の個性を把握しようとする帰納的な臨床研究によって、徐々に明らかにされてきたものだった。そして、そのような実践を通して、私たちが思い知らされ続けてきたことは、私たちが生徒に付けようとしている力やそれを獲得する「いきさつは本物」かということだった。それは、とりもなおさず、生徒の必要感を語る教師の「必要感本物」か、教師の必要感「どこに根ざしている」のかということについて、具体的な経験を教師自身が探究しているのかということに他ならなかった。

「学びを拓く学校づくり」のテーマで研究を進めてきた間、私たちが実践の振り返りの際、常に根底にあったのは、

- ◇ 本校には知的好奇心が旺盛であったり、物知りであったり、のみこみが早かったり、何事につけてわかろうとする意欲を示す生徒が少なくない。こうした傾向は、ともすれば手早くわかることをよしとし、実感の薄い表面的な理解に流れる状況を生みやすいのではないか。
 - ◇ 私たちは、このことを危ぶみながらも、取組の視点を鮮明にし切れていないのではないか。
 - ◇ 私たちの授業自体が、教材を厳選するとか精選するとかいう名の下に、結局は「効率よく概念や技能を植え付けるにはどうするか」といったところに向かっているのではないか。
- という問題意識だった。



表1 必要感に根ざした探究的な学びの実現のために

- ・「もの・人・こと」などの実在的な対象と「体・頭・心」などの全身の感覚を使って出会うこと
- ・対象を「自分のもの」にする生徒の動きを、具体的な姿でとらえ、それを位置付けること
- ・「問いの質」と「問いの質が高まる場」を見ていくことで、学びの質を評価し、生徒の追究を支援すること

表2 学びを拓く教師の構え

- ・教師も生徒も、学びのエピソードを、自分が主人公である物語としてまとめるような試みを、よりロングスパンで行うことを通して、自らが考える拠り所を自覚できるようにしていくこと
- ・教師自身が教材にのめり込んで、実感をもった分かり方をする
- ・教師が互いの評価観や指導観を、日常的に問い続けること

そのような教師の問題意識は、「生徒に何かを学ばせて、ある段階を超えさせよう」とする学びを否定するものではない。むしろ積極的に学習内容の定着を視野に入れてきていた。ただ「教えるための方略は、いかにあればよいか」という視点から学びを構築するのではなく「そのときの生徒の着想や動きが、その生徒の成長にとってどんな意味があるのか」を読み解こうとする視点を大切にしていた。研究の軸足を生徒の側に置き、学びの姿を踏まえて教師自身もつ評価規準を転換したり、学ぶ必要感もてるように単元や教材観を問い返したりしながら、それを読み解いていく実

実践研究を愚直に展開するよう努めていたように思う。そのような取組にあつては、教師と生徒、先輩と後輩、ベテランと若手という直線的な関係性はほとんど意味をなさない。相互に学びの主体者たり得るかどうかが常に問われる場であった。

松本中学校のこうした取組は、子どもたち自身が探求し、コミュニケーションし、協働する力を培う学校教育の実現を目指す福井大学教職大学院の実践と重なることが多い。学校を拠点とした長期の協働実践研究プロジェクト、実践的なカンファレンス・事例研究などを通して、学習と成長をデザインする力や実践の

質を不断に高め発展させていく省察・研究能力等を養おうとしている点もよく似ている。だからこそ、私は今、改めて自分自身の実践の意味を問い直し、再構成する必要感を強くせざるを得ない。多様で深い見識をもつ同僚や、常に研鑽に励む院生の皆さんや、福井県や長野県などの多くの先生方とのかかわりの中で、私の問いの浅薄さに思い至り、私自身の思考や判断は「どこに根ざしているのか」を問う毎日である。松本中在籍当時も、そして今も、私の杖言葉の一つである詩(牛山榮世：平成11(1999)年度～15(2003)年度、松本中学校副校長)をご紹介します。結びとする。

学ぶということ

牛山 榮世

学ぶということ、それは、
 誰のものでもない「私」の問いを生きること
 その問いによって、
 更なる問いに生きることに
 そのようにして
 ものごとの奥行きにふれること
 学ぶということ、それは、
 誰のものでもない「私」の思いをかけること
 そして
 思いがけないことに出会うこと
 そのようにして
 思い知らされること
 学ぶということ、それは、
 誰のものでもない「私」が
 誰のものでもない「あなた」と出会うこと
 それは、見る私が見られること
 それは、働きかける私が働きかけられること
 そのようにして
 私が変わり、あなたが変ること
 学ぶということ、それは
 私のなかにいるあなたと
 あなたのなかにいる私を感じることに
 そのよるこびに浸ること
 そのようにして
 私もあなたも元気になること

Schedule

- 7/4 Sat 7月合同カンファレンス (A日程)
- 7/11 Sat 7月合同カンファレンス (B日程)
- 7/20 Mon - 7/22 Wed 夏の集中講座 Cycle 1a
- 7/23 Thu - 7/25 Sat 夏の集中講座 Cycle 1b

- 7/27 Mon - 29 Wed 夏の集中講座 Cycle 2a
- 7/30 Thu - 8/1 Sat 夏の集中講座 Cycle 2b
- 8/1 Sat 15:00-17:00 福井大学教職大学院入試事前説明会 (総合研究棟 I 13階会議室)

【編集後記】福井大学教職大学院に来て早4ヶ月が経とうとしている。厄介なことに、ここでは新しい仕事を振られる際にほとんど説明がない。このニュースレターもその一つだ。だが私もそれに手をこまぬいていたわけではない。この数ヶ月、とりあえず雰囲気で何とかこなすという対処で対抗してきた。最近、これは正統的周辺参加そのものではないかと感じることがある。しかしそう考えてしまうと、いたずらに振られる仕事に鮮やかに対応してきたという自負が、実践コミュニティに参加させてもらったという体験へと不本意にも変貌してしまう。だからもう少しだけ全般的な参加については考えないようにしようと思っている。末筆ながら、お忙しい中ニュースレターに寄稿くださった方々に深く御礼を申し上げます。(綾城初穂)

教職大学院Newsletter No.75

【内報版】2015.7.4発行
 2015.7.3印刷

編集・発行・印刷
 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
 教職大学院Newsletter 編集委員会
 〒910-8507 福井市文京3-9-1
 dpdtfukui@yahoo.co.jp